

研究

RESEARCH

ある音楽教師の成長の軌跡

湊川短期大学教授
高見 仁志

はじめに

教師は、新人として教職についてから退職を迎えるまで、職業的な充実と葛藤を幾度となく経験する。それは、困難との遭遇と、それを乗り越えようとする営みが複雑に絡み合った起伏に富んだ道程といえる。このような教職経験が、教師の成長に大きく関与していることを指摘する先行研究は多数存在しており、それらは意義ある取り組みとして評価されている。

このような研究的意義は、当然ながら音楽科においてもみいだしことができるであろうが、他の教

科・領域に比べると、研究が積み上がっていないというのが現状である。

そこで本稿では、長年にわたり小学校音楽科授業を行い、県レベルの音楽研究会の指導助言をする等、優秀さと実績を認められている熟練教師（以降、A教諭とする。教職年数二十二年五ヶ月・女性・四十五歳）の教職経験に焦点をあて、聞き取り調査を基にした個人史の再構成を試みる。

聞き取り調査の結果、A教諭の教職経験は五つのステージに区分され、その節目には四つの成長上の転機が訪れていることが明らか

になった。これらの詳細を次から述べていくこととする（文章中の「」内はA教諭の言葉、「」内は筆者の加筆である）。

A教諭の成長の軌跡

「ステージ① 授業の空回りを経験した若い時期（教職一年目〜八年目）」

A教諭は大学卒業後すぐにB県の郡部にあるC町立D小学校へ正規採用の新人教師として赴く。

一年目に故鎌田典三郎の優れた指導法に触れ、西六郷少年少女合唱団の歌を聴き、感動のあまり涙がとまらなかつたという。二年目には、尊敬するE教諭の授業をみて、子どもがひたむきに歌う姿に衝撃を覚えるなど、合唱教育のすばらしさを他者の実践から学び取り、自分のやりたい方向性をつかみ始めてもいる。

しかしながら、この新人期は「苦しいばかりの三年間で、何をやるとんかなというぐらいの、情けない、情けない、情けない」と思

うばかりの日々」でもあった。教職一年目にD小学校の同僚と結婚したため、二年目にはF小学校への転勤を余儀なくされたことも、苦しい新人期を過ごす要因となったようである。

この頃は、まだ小学生の特性を理解できず、授業中に頭声の発声のできない子どもたちを叱りつけると、その子どもたちは音楽が大嫌いになったという。その時の子どもは顔は今でも覚えており、自らの力量のなさで彼らの音楽的成長を阻害したと自戒の念を込めて回想する。自分の満足できる授業が成立しないことに失望し、教師に向いていないのではと悩む新人期であった。

四年目から七年目にかけては、産休、育休を繰り返し、教育実践が積み上がらない状態が続いた。「何をやっていったのか思い出せないくらい」地に足のつかない教育活動を繰り返す時期でもあった。このことに拍車をかけるような学校文化も存在した。A教諭はいう。

「授業については、F小学校では本当にあまり考えたことがありません。授業なんかどうでもいいみたい（学校の雰囲気があった）」。でも、それは大事なことだったんですけれど。座学ばかりが大事ということではなくて、『もっと「子ども」と一緒に遊べ』とか、『子どもと「外へ出ていけ」とか…』。このような学校文化の中、A教諭は音楽科授業の力量を高める機会にも恵まれず、実践が空回りすることもあったという。

【転機①】地域の連合音楽会に初めて参加し他校の演奏を聴く（教職九年目）

教職九年目でA教諭は初めて地域の連合音楽会に参加した。この音楽会は、地域二十五校の六年生が一堂に会し、演奏を発表し合うというものである。この時の経験をA教諭は次のように述べている。「一応がむしゃらには頑張ったんですが、自分の実力のなさにほとほと嫌気がさしました。校内音楽会だったら、自分と皆さん（他

校の教師）との差っていうのに気づく機会もないんですけど」。

自分の力量のなさに愕然としながらも、他校の演奏に触れA教諭は次のことに気づいたという。「子どもにとっても『何がいい音楽かなあ』って思うようになったと思います。ただ歌えるだけじゃなくて…。何も答えは分かんないけど、ただ歌ってるだけでは…。と。ちょっときれいな声が出るようになってたけど、そんなんじゃないような気がして…」。

この気づきは漠然としてはいるが、自己の音楽科授業に対する深い省察であり、確実に一つの転機形成したと回想する。

【ステージ②】転勤によって転機①で得た気づきが効力を失った時期（教職十年目～十一年目）

教職十年目でA教諭はG小学校へ二度目の転勤をする。この転勤によって、転機①における自己の授業への省察もかき消され、効力を失ってしまうのである。A教諭の言葉を引く。「授業は」全然変

わりません。この「転勤の」一年目も失敗しました。ある程度きれいな声では歌うようにはなるんです。でも、喜んで歌うとか、そんなことは全くないし、適当に単に歌ってるという感じ」。

転機①において、音楽科で大切なことに目覚め始めた矢先ではあったが、ここでもA教諭の授業が大きな変化をみせることはない。それどころか、「私、本当に授業下手くそっていうか、授業について工夫をするとかいうこと全然してなくて。ただこうガンガン（一方通行の指導を）やっちゃってます、みたいな」授業を繰り返したという。

「身近に音楽を教えてくれる人も全くなかったし、音楽会の前だけちょっとかじってやって、『ことしも失敗したわ、ええわ、また来年』いうぐらいの」安易な授業に終始したこともあった。ただ、そのような授業を繰り返しているも、「それでも目標はE先生みたいにになりたいな、みたいな、すごく

い無謀な…」といった理想だけは失うことのない時機でもあった。

【転機②】荒れた六年生との授業にいきつまった時、先輩教師から支援を受ける（教職十二年目～十三年目）

教職十二年目に受け持った六年生はいわゆる荒れたクラスであった。A教諭はいう。「なんで歌わなんねん」みたいな子たちと出会ったんです。すごいクラスで…。学校の中に音楽文化みたいなものがないところですよときてるので。春の段階からすごい重荷で」。このクラスの子どもたちは、歌声など出さないので合唱ではなく合奏を中心に指導しようと考えた。しかし、それもうまくいかず悩んでいたところ、先輩の同僚H教諭が音楽が専門ではないにもかかわらず、様々なアドバイスをしてくれたという。初めて同僚から親身な指導を受け、悩み抜きながらも何とかこの一年間を乗り切った。この辛い経験が間接的な転機として作用することになる。A教諭

はい。」「その荒れた六年生と一緒に持った五年生が六年生になった時は、「授業態度がよいので」同じ六年生かと本当に思いました」。つまり、この二つの六年生クラスに生じた差異は、自らの指導の積み上げの有無によるところが大きいことを確認し、A教諭は大きな自信を得たのである。

さらに同僚も、「音楽の先生も頑張ってくれてるから、おまえも頑張れ、とか、一緒になって子どもたちを励ましてくれて応援してくれた」という。この頃からA教諭は音楽科授業づくりについて真剣に考えるようになった。

このような経験から、今まで漠然としていた音楽科授業に対する考え方も少しずつ次のように変化をみせる。「授業を」積み上げることって、すごいと思いました。だから、歌でもリコーダーでも、一回目で「初めての挑戦で」別れ上手にならなくてもいいわって思うようになりました。「短期の（一年間だけ担当する）時は、うまく

いくまで、その時にやりたくなくなる。やらせてやらせて、嫌にならせる。これがダメ」。「一番大事なことは、子どもの心やから、と思うようになりましたね。今ここで、もっとさせることがええのか。これでいいよっていつて、ここでおいといて、この子がこのまま将来音楽が好きやと思いつけるほうがいいのか。その子にもよるけど、いろいろ考えるようになりました」。

この考え方は、後のA教諭の音楽科授業観ともいうべき、指導の根幹をなす指針となっていく。

【ステージ③】 校内の雰囲気や転勤による苦労の中でも実践に手応えを覚える経験をした時期（教職十四～十七年目）

この時期は、生活科の研究に学校をあげて取り組む等、音楽科にまで手が回らない雰囲気校内に漂っていた。そのような中、A教諭は教職十七年目にI小学校へ三度目の転勤をする。A教諭は、「学校かわって、この年もいきなり音楽文化のないところにいっ

て、いきなり六年生なので、『歌ってくださいますか』という状態のところで大変苦勞をしました」。

このような環境の中、転機②でつかんだ音楽科授業に対する考え方や指導法を存分に開花させざることは、このステージでもできなかった。しかし、十六年目に指導した六年生が卒業する時、子どもや保護者から、「音楽の先生も頑張ってくれたことがうれしかった」と告げられ感動を覚えるなど、自己の実践に年々手応えを感じるようになった時期でもあった。

【転機③】 人生に影響を与えるE教諭と同僚になる（教職十八年目）

前述のとおりE教諭は、A教諭が教職二年目の時に授業をみて感動し、それ以来尊敬の念を抱き続けてきたというほどの力量を備えた人物である。

A教諭は、E教諭のI小学校への赴任早々から、自分の授業を何度もみに来てアドバイスを与えてほしいと頼んだ。果たしてそれは

実現し、いつも校長室で反省会が行われた。E教諭のアドバイスヒントに次の授業をつくり、それに対する指摘をさらにそのまた次の授業にいかす、といったことが繰り返された。このことがA教諭の大きな転機となった。

この頃のA教諭は、次のように考えるようになっていた。「もっと深い表現というようなことがあるんや、いうようなことに気づいたりしました。好きで歌いたいか、もっと上手になりたいとか、もっと二部（合唱）やなくて三部（合唱）になりたいとか、子どもたちがいつてくれるように…」『次の音楽いつ？』っていうてくれるような授業を毎回展開したいと。それと歌が好きな学校にしたいと、いつも思っていました」。

このようにA教諭は、子どもの意欲の向上に併せて質の高い表現技能も求め、学校音楽文化を高めようとする考え方を深めていくのである。

【ステージ④】 質の高い音楽科授

業と学校の音楽文化の創造を求めた時期（教職十九年目～二十一年目）

転機③以降、子どもたちも授業を楽しみにするようになり、A教諭は力量を高めていった。さらに十九年目にはE教諭のすすめで、全国レベルの合唱指導者J教諭のもとへ、教師修行に行くこととなる。J教諭の授業を二日間参観し、そこで得た指導法を徹底的に追試した。その内容は音高や歌詞に関すること等、今までA教諭が看過してきたような音楽的要素も多く含まれていた。

このような実践を続けるうち、A教諭の学校の子どもたちは全校的に歌が好きになり、低学年児童は五・六年生の歌声を目標とし始めたという。A教諭はいう。「I小学校は、音楽が今大好きな学校になっていてと思います。小さい学年の子が、『六年生の子みたい、声が僕らまだなあってへんから、僕らはまだ下手やと思う』っていうたんですよ。学校として音楽が、

小さい子が大きい子を尊敬するような機能を果たしているというか、正常な形に動いているというか、高学年の子にあこがれるっていうと、絶対よい学校になると思うんですけど」。

このような学校文化を育てるまでに至ったこのステージ④は、A教諭が着実に力量を形成していく時期であった。

【転機④】 B県小学校音楽研究大会の公開演奏をし大きな感動を覚える（教職二十二年目）

教職二十二年目に取り組んだB県の研究大会における合唱は、五百名程の聴衆を魅了する感動的なものであった。筆者もその場で歌声を聴いていたが、感動で目頭が熱くなるのを禁じ得なかった。この時出演したのは、A教諭が三～四年間にわたって指導してきた五・六年生であった。ここでもA教諭は、授業の積み上げの底力を痛感したという。

この演奏会のことには学校や地域の話題となり、A教諭は感動と共に

に大きな自信を得たのである。A教諭はいう。「公開演奏した子どもたちは」目標になります、自分の目標。この子たちは、今までの中では一番よく頑張れた子たちだと思うので、これからの子たちも、あの子らぐらい音楽が好きで歌える子になってもらいたいな、と。でも、後ろに目標があるというのはしゃくやから、それを今後は越えられたらいいなっていうことです」。このように転機④は、その後教職生活に大きな影響を与えることになったのである。

【ステージ⑤】 基礎基本に立ち返り、新たな目標をにかけて再出発の実践に取り組み時期（教職二十三年目～）

教職二十三年目にA教諭は一年目に赴任したD小学校へ四度目の転勤をする。学校に音楽文化がないというこれまでの転勤と同様の一年目を経験するが、今回はそれを苦労と捉えず、また最初から少しずつ積んでいくのだという態度で勤務している。

その理由として、前述の公開演奏で得た自信をあげる。このD小学校でも基礎基本に立ち返って少しずつ授業を積み上げれば、公開演奏をした子どもたちの状態にいつかは必ず追いつけるのだ、ということを確認しているようでもある。

おわりに

今回は聞き取り調査を基にして研究を進めた。この方法は、研究の枠組みが研究者の信念や先入観によって、あらかじめ決まってしまうがちであることや、サンプル数が少ないといった指摘があることを考慮し、今後さらに多くの先行研究との照合を試みることで信頼性を高めることとしたい。

また、今後何年か経過してA教諭に再度聞き取り調査をした場合、同じ出来事に対して今回と違った見解を示すかもしれない。このような「経験を重ねることによって個人史の再生に変化が生じる可能性」も視野に入れつつ、さらに研究を発展させていきたい。